

で空襲があり、家は焼け多大の被害を被っております。昼は艦載機が地上すれすれに飛んできて無差別空襲です。これは紀州沖から航空母艦で発着いたしたとの事です。

六月の半だと思いますが、大阪都島地区が再び空襲です。私達警防団は関係のある警察からの指令で情操という名の下に朝早く現地に行きました。

都島片町の駅近くに「藤田」と言う大きな家附近一帯が私達警備防団の受持地区です。私達は防空壕から死体の収容を始めました。中で記憶に残るのは、三十歳位の女性の方がモンペイをはいて二歳位の子どもを抱き締めて煙りに巻かれて死んでいました。本当に悲しい思いです。この死体を班員の方々と共に焼跡との都島警察の焼跡まで運びました。人の

死体は重いです。その頃になりますと警防団員の集合は少なくなりまして。皆軍隊兵隊に行ったからです。

防空壕は当時大阪全市各隣組一単位で作ったものです。

当時一単位十軒世帯です。

空襲を受けた地区は屋根瓦だけがちらばり見るも哀れな町の眺めです。私達作業中に敵機が偵察に飛んできます。市電は止まり電気はつきません。なんとも言い表す事が出来ません。八日、十四日の昼は主に爆弾でした。現在の大阪城公園京橋が爆撃に合い、ここでも土に埋められ多くの方々が亡くなりました。この地には陸軍の兵器工場があった所です。翌日の十五日、同じく警防団が出勤して清掃と言うよりどこから手をつけて良いかわからない様な事です。午前中の休憩中に天皇さんから

終戦の言葉がラジオで放送され私達は重い足をひきずり警察署にたどりつき、ここで腰をぬかした様な気がいたしました。

(文の中に警防団と書いてありますのは当時警察消防署のもとで働いた天皇の勅令団体)

昭和二十年八月六日広島、八月九日長崎にアメリカ軍の原子爆弾が落とされました。私は原水禁世界大会に長崎に行きました。ここでも涙あらたな事がありました。各被爆地の三堂様の世話人も皆涙ながらに、どうぞ拜んで下さいと言われます。長崎大会の時、一人の婦人が立ちながら我々に訴えました。戦争しないほしいと言うことです。町内には所々、み霊さまを祭られた小さな御堂が建てられ、私達は線香、ろうそく、供花をお供させてもらいました。心か